

〈資料紹介〉

開成石経拓本

教授 浅見 直一郎
(東洋史〈中国中世史〉)

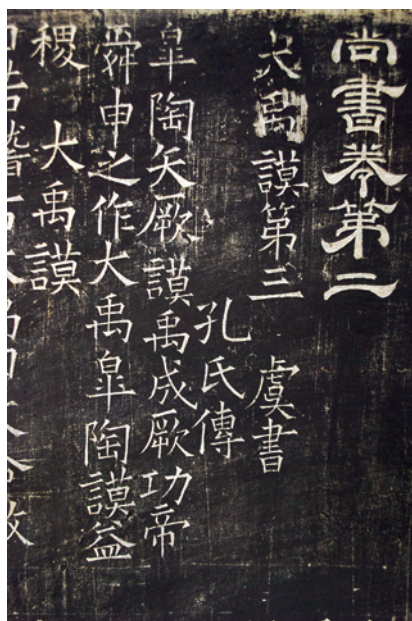
石経とは、宗教經典の文章を正しく伝えるために、その標準テキストを石に刻したものであり、中国では儒教に始まって仏教・道教においても作成された。開成石経は儒教の石経であるが、さまざまな意味において中国の石経を代表するものである。

中国史上、儒教の石経は確実なもので七回作られ、開成石経は古いほうから第三番目にあたる。開成石経より古いものとして後漢の熹平石経(2世紀)と魏の正始石経(3世紀)の二つがあり、開成石経以後のものとしては五代・後蜀の広政石経(10世紀)、北宋の嘉祐石経(11世紀)、南宋の紹興石経(12世紀)、清の乾隆年間の石経(18世紀)の四つが知られている。これらはそれぞれ特色をもつものであるが、残念ながら清の石経以外は多くのものが破損・散逸し、わずかな残石や拓本によってその全容を窺い知ることができるに過ぎない。

その中であって唐の開成二年(837)に完成した開成石経は、9世紀という古い時代のものでありながら、中国陝西省西安市の西安碑林博物館にはほぼ完全な形で現存する。唐王朝が国家事業として制作した開成石経は、数多い中国の石刻の中でも最大・最高のものの一つであり、儒教經典の標準テキストとして重要である(たとえば清代の著名な考証学者である阮元の『十三經校勘記』は開成石経のテキストに依拠している)のみならず、仏教・道教の石経にも大きな影響を与えた石経の典型として、また唐代の字体・書体の規範を示したものとして、中国の他のすべての石刻史料を扱う際の座標軸の役割を果たすもの

である。

今回収蔵品となった開成石経拓本は良質の原拓本であり、その全貌を遺憾なく伝えてくれるものである。すでに大谷大学には重要文化財に指定されている「宋拓 化度寺故僧邕禪師舍利塔銘」および「宋拓 信行禪師興教碑」の二点をはじめとする拓本の優品が多数所蔵されており、また中国の石刻史料・古文書・墨書などを利用したさまざまな研究が盛んに行われてきた。開成石経の拓本は、従来継続的に行われてきた石刻史料の研究に新たな進展をもたらすものであるとともに、博物館学課程などの教育面において、また大谷大学博物館の展示において、内容のより一層の充実を実現するものとして期待される。



「尚書」部分(拓本)